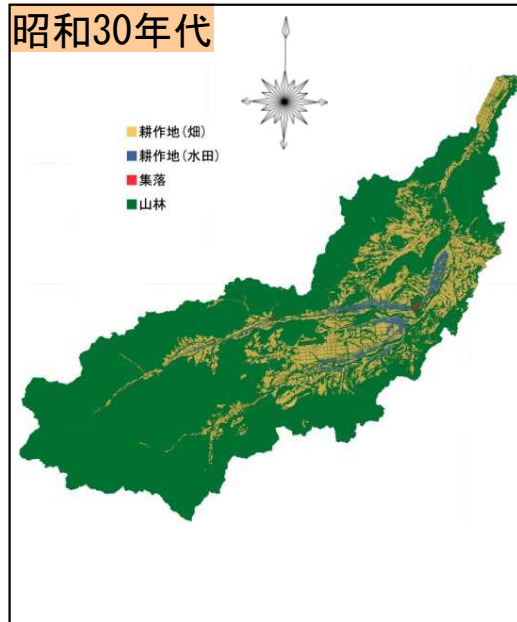


河川整備の効果

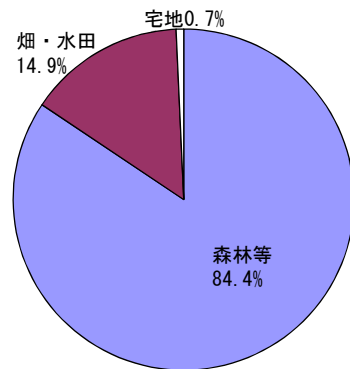
<ストック効果>

ストック効果(土地利用の変化)

- ◆ 常呂川流域の低平地では、度重なる洪水・はん濫を契機に、大正10年以降さまざまな治水対策が施され、土地利用は森林から畑及び宅地等の市街地へと拡大した。

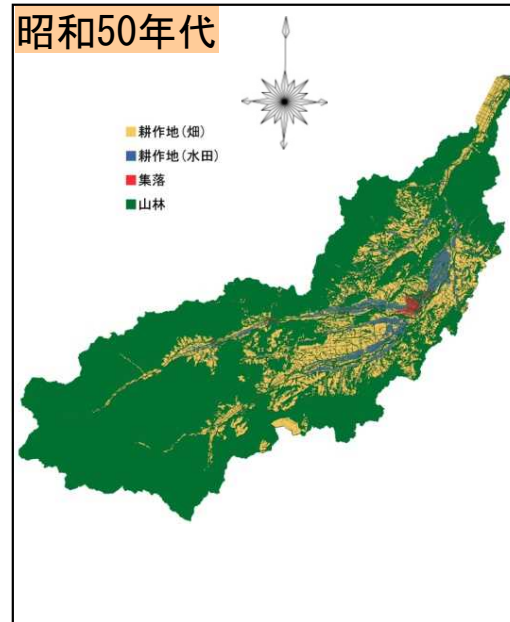
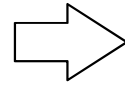


出典：昭和29～30年の5万分の1地形図の地目より作成

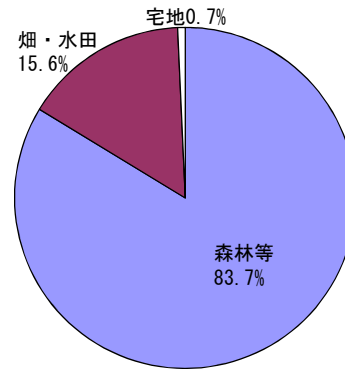


地目別土地利用の割合

出典：市町村勢要覧(昭和29年)の「地目別面積」より作成

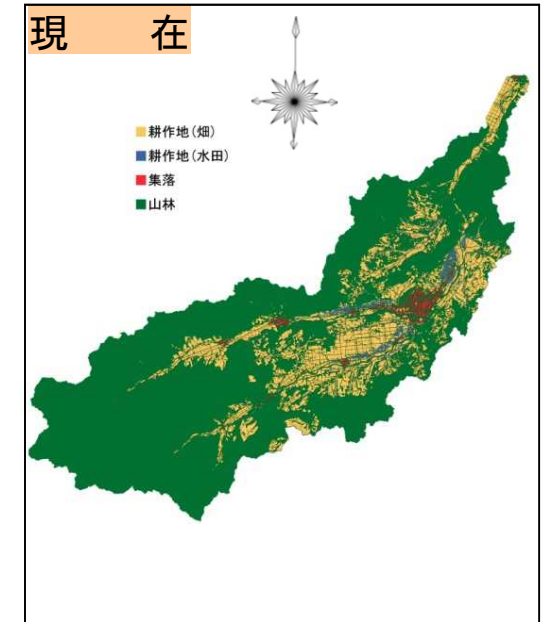
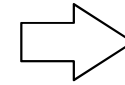


出典：昭和46～54年の5万分の1地形図の地目より作成

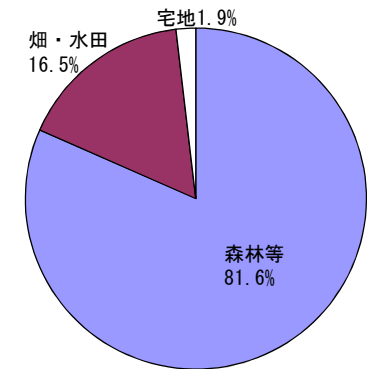


地目別土地利用の割合

出典：市町村勢要覧(昭和43年)の「地目別面積」より作成



出典：平成3～7年の5万分の1地形図の地目より作成



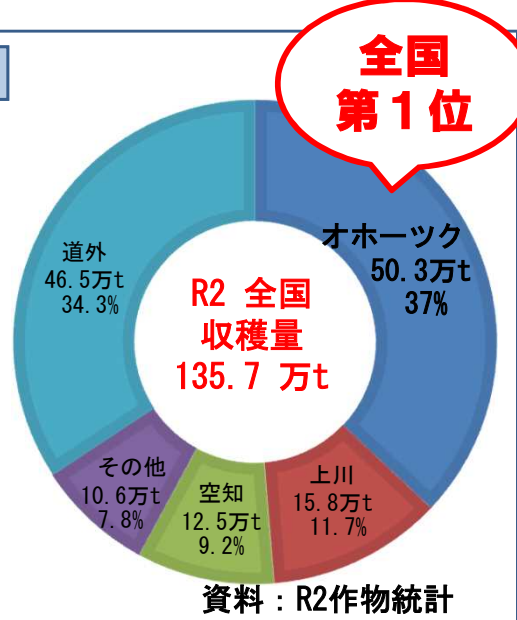
地目別土地利用の割合

出典：第129回(令和2年)北海道統計書の「地目別面積」より作成

ストック効果 (地域経済を縁の下で支える河川事業)

- ◆ 常呂川流域では河川整備事業の進捗に伴い、河川周辺に市街地や農地が形成されてきた。
- ◆ 河川事業と並行して整備されてきた、国営かんがい排水事業などの農業農村整備事業の促進もあり、オホーツク管内のたまねぎの収穫量は、全国一位となっている。

■ 全国たまねぎ収穫量



明治

湿地状の背後地

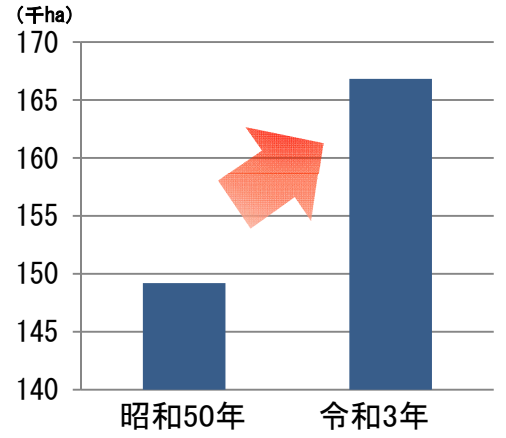
↓

現在

農地形成状況

洪水氾濫の防御及び周辺の土地利用を可能とするため、築堤の整備や、新水路工事等の治水対策が進められてきた。

オホーツク管内耕地面積



オホーツク管内の耕地面積は149千ha (昭和50年) から166千ha (令和3年) に拡大。また、管内4流域の氾濫区域の約80%が耕地であり、洪水により氾濫が生じた場合、農作物への大きな被害が生じ、各家庭への農作物の供給が滞ることが懸念される。

出典：オホーツクの農業2021 (オホーツク総合振興局)

洪水被害

- 近年では平成10年9月、平成13年9月、平成18年8月、平成28年8月に、大規模な洪水が発生し、堤防の侵食等や浸水被害が発生。
- 平成28年8月洪水は戦後最大流量 (速報値) を記録。

平成10年9月洪水

平成13年9月洪水

平成18年8月洪水

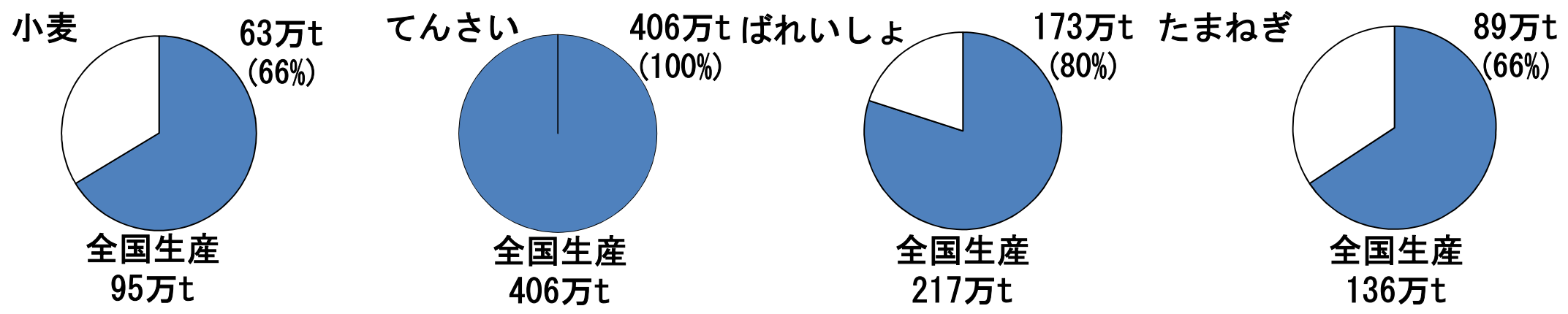
平成28年8月洪水

参考

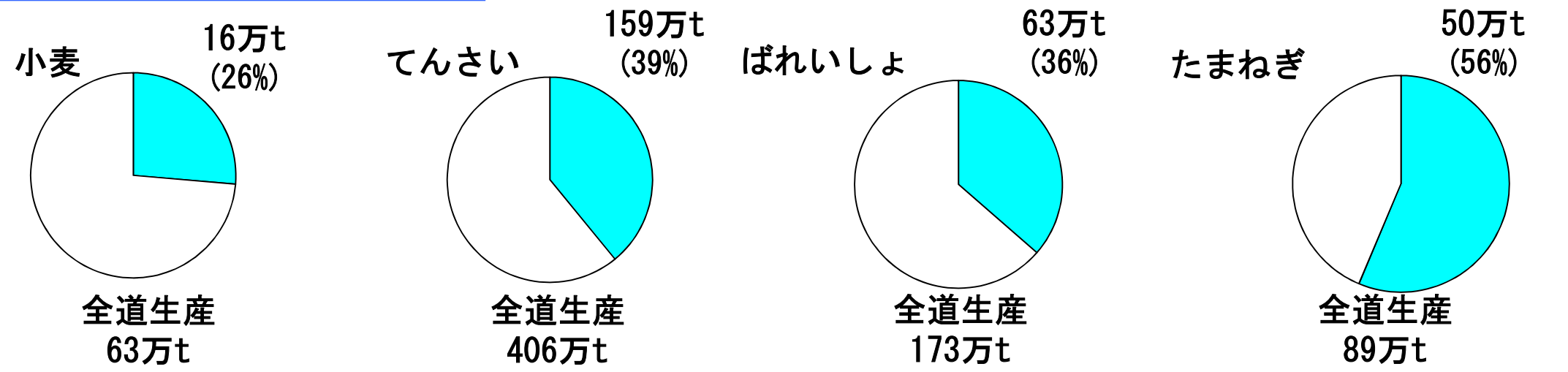
主要農産物生産量（全国シェア、道内シェア）

- ◆ 北海道が日本一の生産量を占める農産物には、小麦、てんさい、ばれいしょ、たまねぎ などがある。
- ◆ オホーツク圏では、てんさい、ばれいしょ、たまねぎなどが、高い道内シェアとなっている。

■北海道が日本一の生産量を占める農産物



■オホーツク圏※の道内シェア



※オホーツク圏(北見市、網走市、紋別市、美幌町、津別町、斜里町、清里町、小清水町、訓子府町、置戸町、佐呂間町、遠軽町、湧別町、滝上町、興部町、西興部村、雄武町、大空町)